

# 学位論文審査の要旨

学位申請者	伊東 亜希子 比較社会文化学専攻2015年度生		論文題目	室町期少弐氏・宗氏の朝鮮通交
審査委員	主査:	神田 由築 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副査:	浅田 徹 教授		「否」の場合の理由
	副査:	大藪 海 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	戸川 貴行 准教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	遠藤 みどり 助教		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (人文科学)			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Japanese History)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

## 学位論文審査・内容の要旨

本論文は、14世紀末から15世紀前半にかけて行われた中世日本と朝鮮との間の通交について、特にその担い手に注目し、当該期の異国間交流の実態解明を目指したものである。

まず序章において中世日本と朝鮮の通交に関する研究史を概観し、従来の研究が対馬を本拠とした宗氏の活動に注目していること、しかしそれは近世日本の朝鮮通交が対馬藩主たる宗氏によって担われたことが意識された結果であり、中世日本の宗氏の活動実態に基づいているとはいえないこと、そして宗氏の主筋にあたる少弐氏へも注目すべきであることを述べた。

第一章「宗氏を起用する室町幕府—応永六年の被虜人送還について—」では、14世紀末に開始された室町幕府と朝鮮との通交を取り上げ、そこでの宗氏の活動について検討を行った。従来、この通交開始にあたっては幕府から周防・長門国守護に補任されていた大内氏の仲介があったと指摘されてきた。しかし、宗氏当主が発給した無年号文書を検討し、その無年号文書の発給年次を比定してそれが被虜人(倭寇によって朝鮮半島から日本に連れ去られてきた人々)送還に関するものであることを明らかにし、その被虜人送還を、大内氏ではなく宗氏が担ったことが通交開始の契機となったと指摘した。

第二章「幕府と大内氏の対立—室町幕府の通交開始に際しての国内の動向—」は、国内情勢に対する検討から、朝鮮通交開始時の大内氏はその仲介役とはなり得なかった理由を考察したものである。朝鮮通交は応永6年(1399)までに開始されているが、大内氏は同年末に、室町幕府第3代將軍足利義満から謀反の疑いをかけられて討伐された(応永の乱)。その大内氏と足利義満との関係が悪化した時期を『応永記』の記述を手がかりとして推定し、朝鮮通交へ向けた外交交渉が行われた応永4年時にはすでに関係悪化の兆候がみられること、ゆえに大内氏は幕府の命を受けて被虜人送還に関与することはなく、朝鮮通交の開始にあたっても仲介役とはなり得なかったと推測した。

第三章「少弐氏による幕府の利用—室町幕府との対立期における少弐氏の朝鮮通交—」は、朝鮮通交開始時から「偽使」(派遣主を偽って通交する者)が横行するようになる15世紀前半までの朝鮮通交に注目し、そこで少弐氏が行った通交の内容を、朝鮮側の史料である『朝鮮王朝実録』を読み解くことによって解明しようとしたものである。『朝鮮王朝実録』には日本から派遣された使者の派遣主と彼らの要求、それへの朝鮮側の対応などが記載されており、その記載から少弐氏の要求に時期的変遷がみられること、そしてその変遷は少弐氏の日本国内の立場の変化と連動していたことを指摘した。

第四章「少弐氏による宗氏の利用—室町幕府との対立期における少弐氏の通交と宗氏—」も、第三章と同時期の少弐氏による朝鮮通交を取り上げたもので、少弐氏とともに通交を行った諸勢力に注目したものである。『朝鮮王朝実録』から少弐氏と同時に通交を行った勢力を検出し、少弐氏が宗氏の立場や宗氏との被官関係を利用して自らの要求が最大限実現されるよう立ち回っていたこと、そして宗氏やその他の勢力も少弐氏を利用して通交を行う面があったことを明らかにした。

終章では、これまで述べてきたことをまとめた上で、14世紀末から15世紀前半にかけての朝鮮通交における少弐氏・宗氏・大内氏の役割と通交への幕府の関わり方について論じた。

審査委員会は、2020年12月16日、2021年1月12日、同年1月21日の3回行われた。審査委員からは、論点を絞って朝鮮通交における少弐氏の役割や活動を明らかにした点が高く評価される一方で、そうした少弐氏の行動の朝鮮通交における重要性を十分に主張できていないことや、東アジアという大きな視点からの位置付けが不十分であるとの指摘を受けた。申請者はこれらの指摘に対して真摯に修正を行い、1月21日の公開発表会では論文の概要を明快に説明し、質問に対して的確に回答を行った。よって、審査委員会は、本論文を、博士(人文科学)、Ph.D.in Japanese History を授与するに相当するものと認めた。